

サイ・テフ 知と技の発信

【222】

埼玉大学・理工学研究の現場

■大きな騒動

昨年、STAP細胞の研究不正が大きな騒動になりました。その騒動から、はつきりと分かったことがあります。それは、正しくない科学であっても人はあれほど面白がることのできる、ということなのです。

昨年、STAP細胞の研究不正が大きな騒動になりました。その騒動から、はつきりと分かったことがあります。それは、正しくない科学であっても人はあれほど面白がることのできる、ということなのです。



やまぐち・しゅうち 1968年生まれ。東京大学大学院理学系研究科修士課程修了。博士(理学)。東京大学大学院総合文化研究科(助手)、理化学研究所(専任研究員)などを経て、2014年4月から現職。専門はレーザー分光による物理化学。

科学の面白さと正しさ

山口祥一 大学院理工学研究科 教授

を決める最も重要なファクターと考えられています。

「あなたの研究はとも面白くない」と言われて喜ばない研究者はいません。逆に、「正しいが面白くない研究」は研究者にとって侮辱の言葉とされていきます。そして、あの騒動を経ても科学の「面白さ至上主義」は微動だにしません。

科学としての正しさは当然の前提条件であって、面白さや、それに加えて新規性、有用性を追求することが科学研究の営みであり続けています。

■広い裾野が必要

しかし、単なる前提の当たりの前のものとして扱えるほど、科学的に「正しい」ということは簡単なものではありません。

実際に、騒動の渦中には、世界的に著名な超一流と言われる

科学者が複数いました。超一流であるにもかかわらず、研究内容が正しくないということを事前に見抜くことはできません。

一方で、不正の発見に主要な貢献をしたのは、当該分野とその周辺の多数の研究者や関係者でした。そのような方々のほとんどは、おそらく超一流とは呼ばれていない普通の人と予想されます。このことは大変示唆に富んでいます。

科学的な正しさを保つのに必要なのは、少数の超一流研究者でなく、多数の普通の人々です。正しいかどうかを見極めるには、頂にいる天才数人よりも、裾野の凡人数万人の方がはるかに有効です。頂をより高く、真理により近づけるためには、広い裾野が必要なのです。

これまで積み上げられてきたものが正しいならば、正しくないものが新しく面白いとされて持て囃(はや)されること

企業、団体、商店街などの話題や情報をお寄せください
TEL 048・7995・9161 FAX 048・653・9040
keizai@saitama-np.co.jp

埼玉経済